

同時代の風景：源氏物語「うつろひ」考

田村，隆
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/8947>

出版情報：語文研究. 93, pp.25-38, 2002-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



同時代の風景

——源氏物語「うつろひ」考——

一

『源氏物語』の舞台が、一体いつの時代に設定されているかという問題は、この物語の研究史において折々の関心にあつてきた。例えば音楽の方面からは早く山田孝雄『源氏物語の音楽』（昭和九年）によつて延喜・天曆年間を想定したとの説が述べられ、また学問に關しても桃裕行『上代学制の研究』（昭和二十二年）によつて、音楽と同様、「時代小説的筆致が窺はれる」との指摘がなされた。さらに『河海抄』以来の所謂準拋論の方面からも、その年次をやはり延喜・天曆年間に想像させる文章になつてゐることが、清水好子『源氏物語論』（昭和四十一年）等で述べられてきた。ここに至つて、時代設定については、延喜・天曆年間という前提で議論がなされ

ることが多いように思う。

しかし、物語の舞台となるのはそれら人事にかかわる事柄だけではない。その背景を彩る風景がある。『源氏物語』の風景については、諸論が引用する、本居宣長の、

此物語は、殊に人の感ずべきことのかぎりを、さまざまかきあらはして、あはれを見せたるものなり、まづおほやけわたくし、おもしるくめでたく、いかめしき事のかぎりをかき、又春夏秋冬をりくくの、花鳥月雪のたくひを、おかしきさまに書あらはせるなど、これみな人の心をうごかし、あはれと思はする物にて、心に思ふ事ある時は、殊に空のけしき木草の色も、あはれをもよほすくさはひとなるわざ也、

田 村 隆

（『玉の小櫛』二の巻¹）

という言及以来、島津久基氏、高木市之助氏、秋山虔氏らによつて様々に論じられてきたが、それらの論に共通するのは、そこでの自然がいかにかに人間と交渉しているかに焦点を絞つてゐる点である。島津氏は、『枕草子』との対比において、「紫女が自然を写す時、それが人事の背景として、即ちその場面の情趣生活の一要素として必須な役分を有つ時のみ成功する」とし、また秋山氏は、『つづほ物語』との比較検討を通して、『源氏物語』においては、「いわば自然は人間であり、人間は自然」であつて、「自然が人間と同次元同等の資格をもつてせり出している」という特質がここにある」と論じる如くである。それらの議論は、結論として紫式部に見られた一回性の天才に収斂していく傾向にあるが、音楽や学問で見られるような時代の枠組みといった観点から風景を見つめる試みはあまりなされていらないのではなからうか。音楽や学問等、人事についてほどではないにせよ、『源氏物語』の風景もまた何らかの時代的な枠組みを持つていたはずである。本稿では、それを解き明かす観点から、『源氏物語』の風景を読み直してみたい。

二

『源氏物語』の風景描写の中に、「うつろひ」という語が

時折現れる。この語について片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』（笠間書院、一九九九年）には、

本来は「移動する」「移転する」の意だが、和歌では、木や草について用い、盛りを過ぎて色あせることをいう場合が最も多い。結果的には紅葉の美しさをいうことになつてしまふ場合もあるが、「色づく」といわずに「うつろふ」という時は常態を前提とした上で衰えゆくことを詠嘆する気持ちが底にあるというわけである。

と説明されている。しかし『源氏物語』中の「うつろひ」には右の定義では覆つことのできないやや特殊な傾向があるように思える。『源氏物語』には複合語も含め五十九例の「うつろひ」がある。そのうち草木について用いられたものは次の八例である。

(イ) 菊いとおもしろく移ろひむわり、風にきほへる紅葉の乱れなど、あはれとげに見えたり。(帚木)

(ロ) 手などのいとわざとも上手と見えで、らうくじくうつくしげに書き給へり。

身に近く秋やきぬらん見るまゝに青葉の山もうつろひにけり (若菜上)

(ハ) 御方の宰相の君、

咲くと見てかつは散りぬる花なれば負くるを深き

うつらみともせず

と聞こえたすくれば、右の姫君、

風に散ることは世の常枝ながらうつろふ花をたゞ

にしも見じ

(竹河)

(二) 御前の菊移ろひはてて盛りなるころ、空のけしきのあはれにうちしぐるゝにも、まづこの御方に渡らせ給て、むかしの事など聞えさせ給に、御いらへなどもおほどかなるものから、いはけなからずうち聞こえさせ給ふを、うつろしく思ひ聞えさせ給ふ。

(宿木)

(ホ) 菊のまだよく移ろひはてで、わざとつくるひたてさせ給へるは、なかくをそきに、いかなる一本にかあらむ、いと見所ありて移ろひたるを、とりわきておらせ給て、「花の中にひとへに」と誦し給て、

(宿木)

風景としての「うつろひ」は右の六例だが、他に折枝として現れる「うつろひ」もある。

(ハ) 日暮かゝるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひ、えならぬをかざして、けふはまたなき手を尽くしたる入り綾のほど、そゞろ寒く、この世の事ともおぼえず。

(紅葉賀)

(ト) 女君の大輔の乳母、「六位宿世」とつぶやきしよひの

こと、物のをりくにおぼし出でければ、菊のいとおもしろくてうつろひたるを給はせて、

「あさみどりわか葉の菊を露にても濃きむらさき

の色とかけきや

からかりし折の一言葉こそ忘れね」と、いとにほひやかにほく笑みて給へり。

(藤裏葉)

これらを一覽してまず気が付くのは、『源氏物語』の「うつろひ」の場合、(ロ)と(ハ)の例がそれぞれ「青葉の山」「花」(桜)をその対象としている他は、皆、菊の「うつろひ」であるといふことである。この意味を考察することから始めたい。

まずは、勅撰集における「うつろひ」について。次に掲げるのは、『古今集』から『後拾遺集』までの「うつろひ」を部立によつて分類し、その対象を示した表である。尚、この表では草木の「うつろひ」と人の心の「うつろひ」を両義的に詠んだ歌については、草木の「うつろひ」を優先的に掲げた。

序	春上	春中	春下	夏歌	秋上	秋中	秋下	冬歌	恋歌	雑歌 など
古今集	心の花 45梅花	80桜	85桜の花 92はな 105花	124山吹 (104花)	187草木 211秋の下葉	247月草 232をみなへし	253神なびの森 254もみぢは255木の葉 262葛 271きく	279菊の花 280きくの花	599涙 714木の葉 726心 729心 795人の心	441古里の花 796心 797心の花
後撰集	42花	59花	82桜花 102人の心 121山吹	122山吹の花	432菊花	371草	444佐保山の梢 450事の葉	541花の心 (963菊) 963きくの花 1156心	1272川竹	
拾遺集		70心 71山吹		145去年の渡 183秋萩			840下葉 842心	359かいつばた 474月草 515秋萩	572月の桂 573常夏の花	1122菊 1070松の緑 1186花
後拾遺集						284秋萩 350菊の花	354きくの花 355菊 356菊	358しらぎく 357きく	914しらぎく 922籬のきく	1136はな 1188八重菊

・表の作成にあたっては、『新編国歌大観』並びに各種総索引を用いた。
 ・表現は、なるべく原文に沿った形にしたが、表記等、一部私に改めた箇所がある。

・()の内の例は、「うつろひ」の語が詞書に見られるものである。

この表から読みとれることを指摘しておきたい。まず四つの勅撰集を通して、夏歌に「うつろひ」は一例も見られず、冬歌にも二例のみである。「うつろひ」に関して特に問題となるのは春と秋の「うつろひ」である。

春の「うつろひ」の場合、その対象として挙げられるのは主として桜である。桜が「うつろふ」時、それはほとんどの場合、散ると同義であるといつて良い。『古今集』八五番に、
 春宮のたちはきの陣にて、桜の花のちるをよめる
 ふじはらのよしかぜ

春風は花のあたりをよぎてふけ心づからやうつろふと見ん
 という歌があるが、桜が「ちる」状況を詠むと詞書に記した上で、歌では「うつろふ」の語を用いている。顕昭の『古今集注』はこの歌に「チルヲウツロフトヨメルカトモコノロエツバシ」と注している。

「うつろひ」が色変わりの意に考えられるのは、秋の「うつろひ」の場合である。表を見ると、『古今集』ではその対象は秋・月草・女郎花・葛・菊などいくつかある。この分布

は『万葉集』のそれに近い。

季部での「うつろひ」は、『拾遺集』でやや数が減るものの、『後拾遺集』に至って再び現れる。しかし、この時には、「うつろひ」の内実は大きく変化していた。『後拾遺集』では十一例（加えて詞書に二例）のうち、一例を除く全てが菊の「うつろひ」を詠んだ歌になっているのである。ここには、『古今集』における「菊の花はうつろふ」という意識から一歩進んだ、「うつろふ花は菊」とする新たな認識の成立が見られると言って良いだろう。それは一つの風景の固定化でもある。

『源氏物語』の「うつろひ」が菊に偏るのも、おそらくこの勅撰集の分布と無関係ではあるまい。『後拾遺集』は「その後久しく撰集はなくて、歌人は多く積りにける程に」（『古来風躰抄』）編まれた勅撰集であったが、収められた歌も「この集どもの歌を見るに、歌の道の、少しづつ variability 有様は見ゆるものなり」（同）という性格を持っていた。『拾遺集』と『後拾遺集』との間の八十年間に、この「うつろふ菊」についての一種の流行があり、それがちょうど軌を一にして成った『源氏物語』に流れ込んだのではなからうか。

『八雲御抄』の「凡菊は万葉に不詠也。寛平菊合已後殊名物とはなれり。」との記述以来、菊の歌が見られるのは『古今集』以降であるとして、『万葉集』と『古今集』との間に境

を設ける見方が多いが、「うつろひ」の固定化という微視的な観点で見れば、むしろその境は『拾遺集』と『後拾遺集』との間にこそ認めるべきではなからうか。

この傾向は歌合を調べてみると更に細かに裏付けることができる。寛平三年（八九一）頃とされる『寛平御時菊合』から元永元年（一一一八）の『内大臣家歌合』までについて、そこに現れる「うつろひ」をまとめたものが次である。

歌合		梅	桜	山吹	常夏女郎花	菊	他
寛平御時菊合		1	2			1	1
寛平御時后宮歌合						1	1
亭子院女郎花合（昌泰元年）				1		4	
本院左大臣家歌合							
亭子院歌合（延喜十三年）						1	
内裏菊合（延喜十三年）						2	6
醍醐御時菊合							
東院前裁合（延長五年）						1	
陽成院一親王妃君達歌合（天曆二年）						1	2
坊城右大臣殿歌合（天曆十年）						1	1
宰相中将君達春秋歌合（応和三年）						1	2
内裏前裁合（康保三年）							
女四宮歌合（天禄三年）						1	
内裏歌合（寛和二年）						1	
四季恋三首歌合							3
前十五番歌合（寛弘四、五年）							1
上東門院菊合（長元五年）						7	
内裏歌合（永承四年）						3	
関白殿蔵人所歌合						1	
禰子内親王家歌合（治暦二年）						1	
殿上歌合（承保二年）						1	
散位源公綱朝臣歌合（長治元年）						2	
雲居寺結縁経後宴歌合（永久四年）						2	
内大臣家歌合（元永元年）	3	2				1	

・『新編国歌大観』並びに『平安朝歌合大成』の索引を用いて作成した。
・歌合の配列は『新編国歌大観』に倣った。尚、催された年次が明かな
歌合については（ ）内に示した。

初期の歌合には梅・桜・女郎花など、数種にわたる「うつろひ」が見えるのに対し、『源氏物語』よりやや時代の下る長元五年（一〇三二）の『上東門院菊合』以降は菊の「うつろひ」に固定化されている。そして、『源氏物語』は右の表では『四季恋三首歌合』と『上東門院菊合』との間ごろに位置し、まさにその固定化に積極的に関わった存在であった。

また、菊合のみを取り出して比較すると固定化の傾向は顕著である。『寛平御時菊合』では二十首ある菊の歌のうち、「うつろひ」を詠んだものは一首しかないのに対し、長元五年十月十八日に催された『上東門院菊合』では、同じ二十首中で、七首が「うつろひ」を詠んだ歌になっている。これは勅撰集における「うつろふ菊」の流行と関わり合っているに違いない。さらに私家集を検しても、勅撰集ほど顕著ではないが、例えば古今集時代の『貫之集』、『小町集』、『伊勢集』などでは未だ様々な対象の「うつろひ」が見られるのに対し、『源氏物語』とほぼ同時代の『大斎院前の御集』、『公任集』、『大式三位集』に見える「うつろひ」の対象はそのほとんどが菊なのである。そして、この流行を物語の舞台に最も反映さ

せ、また自ら流行を決定的なものにしたのが『源氏物語』であった。

三

菊の「うつろひ」といえば、『蜻蛉日記』十三段の、

一三日ばかりありて、あか月がたに門をたたくときあり。

さなめりと思ふに、憂くて、あけさせねば、例の家とおぼしきところにもものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

なげきつゝひとりぬる夜のおくるまはいかにひさしきものとかはしる

と、例よりはひきつくるひて書きて、うつろひたる菊にさしたり。

とあるのが有名だが、菊の「うつろひ」は露や霜によって紫色に色づいた花を賞美する嗜好で、この「うつろひ」については、そこに込められた心変わりの意味、あるいは由来としての「残菊」の検討など、すでに様々に論じられてきた。特に、菅野洋一「菊のうつろひ 日本的美意識の伝統」(『文芸研究』一一九、昭和六十三年)は、菊の「うつろひ」が日本の文学伝統に深く根ざしていることを、豊富な例を用いて

論じている。

さて、これまで「うつろひ」の固定化の諸相を、勅撰集や歌合を題材に検討してきたが、『源氏物語』の「うつろひ」の中には他の物語類には見られない一表現がある。それは「うつろひはてて」という言葉である。菊の「うつろひ」が色変わりとしての秋の「うつろひ」を賞するものであったとすれば、それが「果て」とは一体どのような様子を指すのか。この語の考察を通して、「うつろひ」の固定化の一端をさらに見ていきたい。

次に掲げるのは、時雨の降る季節、帝が女二宮の降嫁を薫にほめかす、宿木巻の一場面である。

御前の菊移ろひはてて盛りなるころ、空のけしきのあはれにうちしぐるゝにも、まつこの御方に渡らせ給て、むかしの事など聞えさせ給に、御いらへなどもおほどかなるものから、いはけなからずうち聞こえさせ給ふを、うつろひ思ひ聞えさせ給ふ。

この「うつろひはてて」について、現行のテキストの本文をいくつか示してみる。

- | | |
|----------------|--------------|
| (古典全書) うつろひはてて | (対校) うつろひ果てて |
| (評釈) うつろひはてて | (大系) うつろひはてて |
| (全集) うつろひはてて | (集成) うつろひ果てて |

- | | |
|---------------|---------------|
| (新大系) うつろひはてて | (新全集) うつろひはてて |
| (完訳) うつろひはてて | |

「うつろひはて」という現象の実体がわかりにくかったためであろう。従来この箇所は右の如く「うつろひはてて」と「うつろひはてて」の二つに解釈が分かれてきた。¹⁰⁾「うつろひはてて」説を採る『日本古典全書』では、池田龜鑑氏は清涼殿のお庭の菊がまだすつかり色が変らず盛りの頃、菊は霜が置いて色の移り初める頃を盛りとした。

と注しており、また一方の「うつろひはてて」説は『日本古典文学全集』に、

「うつろひはてて」とする読み方もあるが、『玉の小櫛』が「略(うつろひはててとは、全くよくうつろひたるをいふ也」としたのに従う。

とある。両者を比較すると「うつろひはてて」説は積極的な説明をなし得ておらず、実に歯切れの悪い印象を受けるが、これはやはり「うつろひはてて」について、実体としての把握が極めて困難であることに起因しよう。清水婦久子氏は「風景に関わる引歌表現を検討してきて気づくことは、源氏物語の風景描写の基本的姿勢が映像として具体化し得る光景を作ろうとしていたことである」(『源氏物語の風景と和歌』和泉書院、一九九七年)と述べているが、このように、必ず

しも容易にその実体を想像しがたい風景の例もやはり存するのである。須磨巻に見られる「桜の、散り、すきたる枝に」、或いは梅枝巻の「散り、すきたる梅の枝に」が、古注の説く如く「散り透き」を示すのだとすれば、これなどもその例に加えることができよう。

実体としての把握が困難であるという点、これは現代の読者のみが直面する問題ではなかった。この箇所と言及した注釈書を時代順に並べて整理しておきたい。

まず、室町時代に三条西実隆が、「はてで」と主張している。これが、後の時代にまで影響を与えることになる。

うつろひはてすして也うつろふからに色のまされはの心也、
(『細流抄』)

晩秋、もしくは初冬に「うつろひはて」た花が「さかり」であるはずがないという見解である。この説の束縛は長く、中世の他の諸注はもちろん、近世の代表的テキストである『湖月抄』、『首書源氏物語』においてもやはり「はてで」に作っている。

一方の「うつろひはて」説であるが、これは契沖の『源註拾遺』において登場する。

今案、ての字清むへし。此案の下に、菊のまたよくもううつろひはてゝわさとつくるひたてさせ給へるは中くお

そきに、いかなるひともとにかあらんいとみとこころ有てうつろひたるを云々。又伊勢物語に神無月のつこもりかた菊のうつろひさかりなるにといへり。うつろふ事のさかりなる也。うつろひたるとさかりなるとにはあらず。時分にても知へし。うつろひて後一さかりあるか菊の徳なり。

ここでいう「伊勢物語に」とは、『伊勢物語』八十一段を指している。一部分を次に掲げる。

むかし、左の大臣いまそがりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて住み給ひけり。神無月のつこもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、紅葉の千種に見ゆるおり、親王たちおはしまさせて、夜ひと夜酒飲みし遊びて、夜あけてゆくほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ。

そして、「盛に又うつろふも有也」(『肖聞抄』)と解されていた「うつろひさかり」について、古注を退け新見を示したのも実はまた契沖だったのである。

或注に紅なとにうつろひ、又さかりなるもあるなりとあるは不審なり。さもじに「こりてうつろへるさかりにと心得へし。そのゆゑは、神無月のつこもりがたといふにて知ぬ。さかりなるはあるべからず。きくはうつろひて後

又ひとさかりあるを、こと花にたがひて賞するものなり。

(『勢語臆断』)

『勢語臆断』は元禄五年(一六九二)の成立とされ、一方の『源註拾遺』の注釈部分が成つた元禄九年(一六九六)に先行する^①。この成立事情を考え合わせれば、宿木巻についての契沖の新見は、『伊勢物語』に対する注釈を敷衍したものと見るべきではないか。

ただし、この『勢語臆断』に見られる「うつろへるさかり」と心得へし」との解釈は、実は契沖の全くのオリジナルというわけではなかった。なぜならこの「うつろへるさかり」という表現は、『伊勢物語』本文の当該箇所が持つ異文に他ならないのである。『伊勢物語』に就きての研究 校本篇 に拠れば、非定家本系統の大島本・神宮文庫本が、「うつろひさかり」を「うつろへるさかり」に作り、真名本にも「菊花移江流栄」とある。あるいは契沖はこれらの本文に導かれつつ、「うつろひさかり」の解釈にたどり着いたとも推測されるのである。事実、荷田春満の『伊勢物語童子問』では「是はうつろへるさかりとみえたり。真名本には移江流栄と有也。」として真名本への目配りを明示し、また真名本を重く見る賀茂真淵の『伊勢物語古意』では、本文をすでに「うつろへるさかり」として作っている。藤井高尚『伊勢物語新釈』も同じ。

「うつろへるさかり」という『伊勢物語』解釈に支えられ、宿木巻の例は以後、「うつろひはてて」にほぼ決定づけられる。真淵の『源氏物語新釈』でも、

古へは白きくよくうつろひて紅に見ゆるをめてたる事いと多し右をうつろひたると盛なると心得るは後人の心也十月なれば実の盛はいかてかあらん

の如く、契沖の説に従っている。「うつろひ」の美学に「古へは」とことわりを入れつつではあるが。

宣長もまた、その説を継承している。付言すれば、宣長は『湖月抄』の本文について、

中には句によりて、いたく語の意をも、誤ること多し、その心してよむべし、清濁も、わるきことおほし、

(『玉の小櫛』湖月抄の事)

との評言を記しているが、この箇所も宣長にすれば「わるきこと」の一例であつたらう。

このように、契沖に始まった「うつろひはてて」の説はこの箇所に関する新たな解釈を確かに指し示した。だが、ここで一つ疑問が残る。それは、契沖によって「うつろひはてて」が『伊勢物語』の「うつろひさかり」に支えられた語であることは説かれたが、「うつろひはてて」自身の履歴は実は全く分明でないという点である。それはいつどのように生じた

表現であつたのか。契沖は「うつろひはてて」と「うつろひざかり」を同じ風景と見るが、そこに本当に違いはないのか。その考察が次の課題となる。

四

「うつろひはつ」の語は平安朝の物語類には他に見ることができない。和歌の中にわずかに見いだされるが、「うつろひはつ」が現れる前に、すでに『後撰集』恋四に次のような表現がある。

忘れ侍にける女につかはしける

よみ人しらす

菊の花うつろ心を置く霜にかへりぬべくも思ほゆる哉

(八五二)

返し

今はとてうつろひはてにし、菊の花かへる色をば誰か見るべき

(八五三)

心変わりに本意を置いた贈答歌である。そのためであるう、この歌は恋部に配されており、秋の彩りを記す歌群とは離れている。また、「ここでの」「うつろふ菊」は、折枝という道具として用いられていることにも注意すべきである。この二点

から明らかかなように、「ここでの」「うつろふ菊」は風景を書き留めたものではない。

「うつろひはつ」の初見は応和三年（九六三）に催された『春秋歌合』である。

鹿の御かへり

名残なく移ろひ果つる秋なれば鹿も侘びたる声ぞ聞ゆる

(八五)

ここでは未だ菊を詠んだものではないが、初出例として数えておく。

問題の、菊が「うつろひはて」る様は、『能宣集』において初めて現れる。

九月、山里なる人の家に、女どものはへるところに、

鷹すゑたる男まできたり、菊の花はべり

かりにこむ人にをらるな菊の花うつろひはてん折までも

みじ
(西本願寺本四〇〇)

また

はし鷹を手ひきすゑて山里のやどかりにこそ今日はき

にけれ
() 同 四〇一

書陵部本・冷泉家本では下句を「うつろひはてんすゑまでもみむ」とする。『後拾遺集』にもこの形で入集しているが、こちらは詞書が、「屏風の絵に菊の花さきたる家に鷹すゑた

る人宿かる所をよめる」となっており、実際の風景を詠んだものではないとする。ただ真の詠歌状況はともあれ、「うつろひはてんすゑまでも」すなわち「すっかり色変わりする果てまで」（『新日本古典文学大系』）という時、この菊の花は厳密には未だ「うつろひはて」る前であることは確認しておいてよいだろう。能宣はこの花を目にし、「うつろひ」の極みを想像したのであって、それは必ずしも実体を伴わない。

能宣の時代には未だ「うつろひ」の固定化は生じておらず、この一首が特に目立ったものであったとは思えないが、能宣は、『紫式部日記』にも道長から中宮への贈物についての記事の中に、

表紙には羅、紐をなじ唐の組、懸子の上に入れたり。下には、能宣・元輔やうの、いにしへいまの歌よみどももの家くの集書きたり。

と、その名が見え、紫式部が風景として初めて描いた「うつろひはて」という光景は、その表現の層において、この能宣の歌を意識したものであるかとも考えられるのである。

能宣はこの「うつろひはつ」という語を好んだらしく、同じ『能宣集』四四七番に「世中をおもへばくるし」で始まる長歌があるが、その中にも一例見出せる。ただし、ここは菊を詠んだものではない。

へにけむそでの ふかみどり 色あせかたに 今はなり
かつ下葉より くれなゐに 移ろひはてん 秋にあはば
「うつろひはつ」はやはり推量の形で用いられている。この歌は『拾遺集』雑下・五七二番に、入集している。

その他には、『源氏物語』よりやや時代の下る『大斎院御集』に、

はつかあまり雪いみじつふりたるに、さだよりの君、
菊の枝にわたおほへるやうに雪のかかれるを、大ば
ん所にたてまつれば、みるに、花もいたううつろは
でしるきがちなれば、つくりたるはをつけてかぎつ
く

みなながらうつろひはてぬしらぎくにひとついろにもゆ
きかかると
(四七)

返し

ほしうへに雲のかかるとまぎれつとおぼつかなしや雪
のしたぎく
(四八)

とあり、また『相模集』五九三番の長歌の中に、

きくにつけても 霜枯れて うつろひはてし、 まがきに
も おき所なき 露の身は

とあるのが『源氏物語』前後の「うつろひはつ」の全ての用例である。

そして、「うつろひはてて」の語は『源氏物語』自身の中にもう一例ある。同じ宿木巻から。

菊のまだよく移ろひはてて、わざとつくるひたてさせ給

へるは、なかくをそきに、いかなる一本にかあらむ、

いと見所ありて移ろひたるを、とりわきておらせ給て、

「花の中にひとへに」と誦し給て、

「まだよく移ろひはてて」とは、明らかにその「うつろひ」を賞美する書様であり、「ここから」「うつろひはつ」が負の評を得ているとは思えない。『能宣集』の例などからも確認できるように、あくまで「うつろひはて」ることが関心事である。「新潮日本古典集成」では一例ある「うつろひはつ」のうち、先の例を「お庭先の菊がまだすっかり色変わりしおわらず、盛りの際に」と「うつろひはて」ることを負の評で解しておきながら、一方で後の例を「十分に色変わりもしきれないで」と今度は同じ現象を美しいものの如く説明しており、「うつろひはつ」の評が齟齬をきたしているのである。問題の箇所はやはり「うつろひはてて」を採ることはできない。野口武彦氏は『花の詩学』（朝日新聞社、一九七八年）の中で、この「うつろひはてて」を「この花の類落と絶頂のあわいの美」と批評しているが、加えてこの「うつろひはてて」が、「うつろふ菊」の流行という文脈の中で、風景として初

めて現れた表現であったことを確認しておきたい。

五

『蜻蛉日記』の例に代表される『源氏物語』以前の「うつろふ菊」は、歌の贈答という場面上的の必然性はあるにせよ、手紙の折枝等の道具として用いられる例が多かった。小松茂美『手紙の歴史』（岩波新書、一九六二年）にも掲出されている。ところが、『源氏物語』においては、それに加えて風景としての「うつろふ菊」が散見され、またさらに推移を進めたところの「うつろひはてて」という語も見られるのである。これらは、『後拾遺集』に至って結実する「うつろふ菊」の流行と関わりがあるのではないかと述べてきたが、この固定化は、『源氏物語』前後に至って、散文にも随所に現れるようになる。『紫式部日記』に一例見られる「うつろひ」も、御幸近くなりぬとて、殿のうちをいよくつくるひみが、せたまふ。世におもしろき菊の根をたづねつゝ、掘りてまいる。色くうつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植へたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老ひもしぞきぬべき心ちするに、
の如く菊を評するものであるし、『枕草子』の能因本にも

「草の花は」の段に、

草の花は なでしこ、唐のはさらなり、やまともめでたし。女郎花。ききやう。菊の所々うつろひたる。かるかや。竜胆、枝さしなどむつかしげなれど、こと花はみな霜枯れたれど、いと花やかなる色合ひにてさし出でたる、いとをかし。

と書きとめられている。⁽¹²⁾ やや時代の下る『栄花物語』、『狭衣物語』でも草花の「うつろひ」の対象は菊以外には見出せない。しかも、これらの「うつろひ」は、単に自然の菊を詠んだものばかりではなくなり、次第に服飾の分野へと浸透していく。例えば、『狭衣物語』には、源氏宮を評する場面において「蘇芳の御衣どもに匂ひ満ちたるに、浮線綾の白き八重なる、籬の枝さしよりはじめ、移ろひたる色のけざやかに見えたる」(巻三)のような形で、服飾部門での「うつろひ」が登場する。『栄花物語』でもむしる服飾における「うつろふ菊」を描いた例の方が多い。そしてその固定化は、一例を挙げればやがて一条兼良『女官節鈔』に「うつろひ菊」の項目が立てられるといった形で結実するのである。

『源氏物語』で描かれた「うつろふ菊」の風景は、やがては歌論書にも姿を見せる。『古来風躰抄』には、部立に見合ったそれぞれの景物が描き出されるが、秋の箇所を見ると、

秋深くやうやう時雨ゆくままには、四方の山の梢色深くなりゆき、籬の菊、霜に移ろひゆくなどは、いふべきにもあらぬを、

とある。ここからも「籬の菊、霜に移ろひゆく」現象が秋の本意として定着していることがよく読みとれるであろう。また歌合でも「初秋に移ろふや」(皇后宮春秋歌合、天喜四年)といった判詞が現れるようにもなる。

一方の「うつろひはつ」については、『源氏物語』の時代以降はほとんど姿を見ない。わずかに『風葉和歌集』一三二五番、

女二のみこ、承香殿に住み給ひけるに、前の菊を折らせ給ひて、閑白にみこの賭物にたまはずとて

うちぬ石間の朱雀院御歌

分きて折る心も深し九重に移ろひ果てよ、白菊の花

などに痕跡をとどめるに過ぎない。この歌においても、岩波文庫版で「宮中ですつかり色変りするまで栄えよ」という訳がついているように、⁽¹³⁾ 決して衰微の極致を示すものとしては把握することができない。『源氏物語』と同じ風景を担っている様子が窺える例ではあるが、こちらの語は、ついに広く用いられることはなかった。

冒頭に述べたように、『源氏物語』の舞台は一般に延喜・

天曆年間に置かれていとされることが多い。だが、その舞台に必要な風景も時代によって当然いささかなりの変化はあらずである。本稿ではわずかに「うつろひ」の風景のみを取り上げたにすぎないが、その例を見るかぎり、そこに展開されている「うつろふ菊」の風景は古今集時代よりも後の印象があり、多分に同時代的なものであった。また、その推移を進めた「うつろひはつ」は、『源氏物語』前後の極めて短い時期に描かれた、一層同時代的な風景であったのである。

注

- (1) 「本居宣長全集 第四卷」(筑摩書房、昭和四十四年)
- (2) 秋山虔「源氏物語の自然と人間」(『王朝女流文学の世界』東京大学出版会、一九七二年)に諸説がまとめられている。
- (3) 『対訳源氏物語講話』きりつぼ(中興館、一九三〇年)
- (4) 『源氏物語』に見られる「うつろひ」についてはすでに鈴木正道「うつろふ考 源語と狭衣と」(『日本文学論究』三三、昭和四十七年)に分類がなされている。ただし氏は、「口」と(八)の例を草木の色変わりとして認めない立場をとっている。
- (5) 『源氏物語』の引用は、『新日本古典文学大系』による。
- (6) 『日本歌学大系 別巻四』による。
- (7) 『後拾遺集』における「うつろひ」の分布と菊の重視に関しては、久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、平成十一年)に言及がある。

- (8) 小島憲之『古今集以前』(埴選書、昭和五十一年) 上坂信男「桃と菊と」(『源氏物語』その心象序説、笠間選書、一九七四年)など。
- (9) 但し、古今集時代でも、凡河内躬恒は菊の「うつろひ」を好んだようである。尚、『貫之集』の「うつろひ」については竹岡正夫『古今和歌集全評釈』(昭和五十一年)にまとめられていること、後掲菅野氏の論文に指摘がある。
- (10) この箇所に対する論及としては、前掲、菅野氏のほか、岡部明日香「宿木巻の「菊」 宇治十帖の皇統の意義」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四十四、平成十一年二月)があり、王権論の立場から、宿木巻の菊を「寄る辺を失った皇統の女性」という喩として解釈する試みがなされている。
- (11) 久松潜一「契沖伝」(至文堂、昭和五十一年)の区分によれば、『勢語臆断』は第二期の「余材時代」、『源註拾遺』は第四期の「拾遺時代」に属する。氏は第四期について、「第一・二期の様に全註でなく、摘註であり、態度もこれまでの蘊蓄を以て批判的に考察したものが多く、そこに大成した学問の強さが自ら現れてある」と指摘する。
- (12) 但し、三巻本・前田本・堺本には「うつろふ菊」に触れた部分がない。
- (13) 樋口芳麻呂校注『王朝物語秀歌選』(下)。(岩波文庫、一九八九年)

(たむら たかし・本学大学院修士課程)